
理想の彼女と現実の壁

最終兵器

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理想の彼女と現実の壁

【Nコード】

N3725T

【作者名】

最終兵器

【あらすじ】

私立 味山^{みやま}東高等学校。長い歴史とは裏腹に偏差値が低く、奇天烈で奇想天外な連中が多い高校だ。

そんな中に一般から見たらごく普通の高校生、村上有人（16歳）がいた。

彼の女性の好みはズバリ年上。年上にしか興味がないのだ。

しかしある日、幼馴染である倉持百合香（17歳）の妹である有奈（15歳）と半ば強制的に付き合うことになってしまう。

ドタバタ学園ラブコメディになるといいな、っと思っっているよ！

ほとんどエピソード 物語の発端（前書き）

この物語はフィクションです。実在する、事件・団体・人物・その他もろもろとの関係性はいっさいないです。

ほとんどエピソード 物語の発端

俺の友は言った。

「おれは年上には興味がない。」

恋愛的な意味で。ちなみにこいつはタメにも興味がない年下好きのロリコン野郎だ。年の差15までOKらしい。

そして俺は言った。

「おれは年上にしか興味がない。」

これもまた恋愛的な意味で。でも俺は、年の差は5〜6が限度。過去2回、俺は付き合ったことがあるがいずれにせよ年上だ。一人目は2つ上。二人目は3つ上だった。まあ、どっちも中坊の時で、高校に行くからとかさうゆう理由で別れたが、

そんな俺が、

「あれ、どうしたんですか？」

今付き合ってるのは、

「先輩っ！」

年下だったりする。

ことの始まりは2週間ほど前のことだ。

私立 味山^{みやま}東高等学校。文武両断を重んじる歴史のある名門校だ。

しかし、偏差値が微妙に低く奇天烈で奇想天外な連中が多い。

「有人！」

「ああ。」

俺の名前は村上有人。こんな学校の中、一般的にはどこにでもいるただの男子学生だ。部活には入ってなく、やりたいこともなくダラダラと過ごすただ無気力に過ごす高校二年の。

「いたいた。やっと見つけたよ。」

こいつはただの腐れ縁、森永 雪。ニツクネームはユキとウインター。大半がウインターと呼んでる。ちなみに、年上に興味のない友とゆうのはこいつだ。

「なんだよ、ふゆ。なんかおれに用か？」

「雪だよ。百合香が呼んでたぞ。5分以内に屋上だとよ。」

「マジかよ！5分つてあと何分だ！？」

「すぐにお前見つけたから4分ぐらいだ。さっさと行って来い。」

「おう！」

倉持百合香。俺と雪の幼馴染。現、生徒会副会長。時期、生徒会会長候補。及び、剣道部部长。我が高校の2学年生は彼女のことをこっぴど呼ぶ。

美貌と才能を持った鬼神。

鋼鉄の美女。

美貌をかぶった殺人マシン。

性質が悪いのはめっちゃくちゃな美貌の持ち主とゆうところだ。なに性格はドがつくほどの真面目、そしてドがいくつ付いてもおかしくないほどのドスだ。

これにより彼女にこき使われる男が後を絶たない。おごらされたとかはないみたいだけど。

俺と雪に対しては拳が出る。幼馴染っていやだ。

これにより、俺と雪は百合香の言うこと（命令）で首を横に振ったことがない。振ったら首の骨を曲げられそうで怖い。奴ならやりかねない。

そんな不安と恐怖を抱え俺は屋上に走った。

「早かったわね。有人。」

「ユキが手っ取り早く見つけてくれたおかげでね。」
「そう。」

目の前にはフェンスの前にある段差に足を組み腰かけて座る百合香がいた。俺の脚がガタついてきてもいる。

「用ってなんだよ。前置きはいらねえから本題を話せ。」

「前置きなんてする気はさらさらなかったけどね。」

はあく、っとため息を漏らし、だろうな、と心の中でつぶやいた。

「それじゃ、単刀直入に言わせてもらおうわ。」

「ごくりっ、と俺はつばを飲み込む。それと同時に変な緊迫感が屋上を包む。」

「私の妹と付き合って！」

「・・・は？」

単刀直入過ぎて分からない。これは前置きがあった方が分かりやすかったかもしれない。

「まて、意味が分からない。とゆうか、過程をすつとばすな。」

「あんたが前置きはいらないうって言ったんでしょうが。」

「前置きと過程は別のもんだから。」

しかもこいつ、俺が年上にしか興味ない事知ってるくせに。いやがらせか、拷問かのどちらかだわ。これ。

「あんた、あたしの妹の有奈は知ってるわよね。」

「ああ。」

なんとか百合香の家には遊びに行ったことがあるからな。っと付け加える。

百合香の妹、有奈は百合香の1つ下で同じ高校に通っている。いつも姉の百合香にべったりでほとんど一緒だ。子供のころから俺と雪、百合香で遊んでいたが、ある時をさかえに有奈も俺達と一緒に遊んでいた。

「有奈はあんたのことが好きなのよ。」

「嘘だろ！？冗談はよせ。」

百合香は沈黙していた。これは冗談じゃない。百合香は真面目な時

はいつも沈黙するからな。

「それで、これを渡すように言われたの。」
はいっ、と百合香は手紙を差し出してきた。

「何だこれ？」

「見てわかんないの？ラブレターよ。有奈から、あんたへの。」
認めたくないがそうらしい。それにしてもベタなことするな。有奈も。

「なになに。有人先輩へ。あいつ、いつからおれのこと先輩って呼ぶようになったんだ？」

さあ、と百合香は首を傾げる。

そんな事はおいといて手紙を読んでみる。

「えっと、なになに、

有人先輩へ。

話したいことがあるので明日の放課後、屋上に来てください。

有奈より。

短かつ！こんだけのために封筒使うなよ！」

一行のためだけに封筒を使うとわ。百合香の妹ながらやるな。

「とりあえず丁寧に断わらせてもらっわ。」

年下と付き合う気ないから、と言って屋上から立ち去るつとドアの方を向く。

ドゴツ！

得体の知れない何か俺の横を通り、壁をえぐる。

「え、英和辞書？」

正体は辞書だった。当たってたら確実に死んでたぞ。恐る恐る後ろを向く。

「分かってるわね？」

そこには類笑みを見せる冷徹な殺人マシーンがいた。

「はい、分かっております。」

俺はいつから百合香の下僕いぬになり下がったんだか。

有奈を振ったら地獄行き。

俺にはもう、選択肢は1つしかなかった。

ほとんどエピソード 物語の発端（後書き）

お読みになってくださいますと誠にありがとうございます。また次話にてお会いいたしましょう

ほとんどエピソード 生と死の境界線に立ち(前書き)

この物語はフィクションです。以下省略。

ほとんどエピソード 2 生と死の境界線に立ち

現在、時刻は5時を回りかけている。場所は我が家のマイルームである。

「有人。いつもの勉強会を返上して緊急会議をするってことは結構重大なことなんだな。」

いつもの勉強会とゆうのは、俺と雪と百合香、時々有奈の四人で勉強をするいたって平然とした会だ。といってもいつもは雪と二人でやってるが。この会のおかげで俺と雪は1年中間、期末、学年考査で百合香に次ぎ2位、3位の座につけた。そのため2年になっても日課になってる。

「ああ、今日緊急会議の招集をかけたのはほかでも無い、昼休みの件についてだ。」

緊急会議といってもプレステをしながら話すだけだが。しかも、実際にプレイしてるのは雪だけで、俺はコンポで音楽を聴いてるか雑誌を読んだけただが。

「つで、何があつたんだ？有人。」

「ん？ああ、」

俺は雪に昼休みに百合香の妹である有奈が明日の放課後に告るから振ったら殺すよっ、とゆうことを何の脚色もつけず話した。

「お前、それ、やばいじゃん。」

「別に、そこまでやばくはないんじゃないかね？」

「そうか。それじゃ、あの世で待ってる！」

俺が振る前提で聞いてやがった。薄情なやつだ。幼馴染（腐れ縁）に向かつてあの世で待ってるとか。

「バーカ、一日じゃ決められねえよ。」

そう、俺には秘策があった。

—翌日—

その放課後。とうとうこの時が来てしまった。

予定通りSHLを終えて屋上に向かう。後ろから禍々しい殺気が襲う。恐るおそる振り返るとそこには百合香がいた。

「振ったら殺す。」

そんな感じのドス黒いオーラを放っていた。

そんな百合香は無視して2階、3階と階を上がっていく。しかし、一向に殺気は止まない。多分まだ百合香が付いてきているのだろう。百合香のやつ、このまま屋上まで付いてくる気か？

そんな事を思い歩いていたら屋上の入り口まで来てしまった。

「はあ、とうとう来てしまったか。さすがにあいつは来ていないだろう。」

そんなことを頭に浮かべながら扉のドアノブに手をかけ、開ける。

「あつ！先輩！お久しぶりです！」

居た。笑顔だが顔を赤くしてあいさつえをする有奈が。

久しぶりといっても、3日前の勉強会で会ってる。その様子から有奈はこの時点でいっぱいいっぱいというところだ。

「おう。久しぶりだな。」

久しぶりではないが調子を合わせるために言う。

「手紙を読ませてもらったけど、話ってなんだ？」

ここはあくまで自然に聞く。百合香が内容を全部俺にぶちまけたために何を言うかは分かっているが。

「そ、それはですね。」

さっきまでは結構普通だったのにいきなりガチガチになった。

そんな中、俺は入口のほうに目をやる。

するとそこには目を光らせのぞき見をしている百合香の姿があった。まさかとは思ったが本当にここまできやがった。

「じ、実はですね先輩。驚かないで聞いてください。」

「お、おう。」

百合香に意識がいつて有奈のことを忘れかけてた。てか、俺程度の

人間にそんなガチガチにならないでほしい。

「実はあたし、せ、先輩のことが、」
ゴクリ。

ああ、なんか言われること分かってんのにこっちまで緊張してきた。

「先輩のことが好きなんです！」

予定どりのカミングアウト。

ここで俺は生と死の境界線に立つ。俺は無神論者だからあの世は信じてはない。だから長生きしたいとは思ってる。

だからここで執行猶予をもらおうとしよう。

「有奈がおれのことを好きだって知らなかったよ。正直びっくりしてる。」

「そ、そうですね。」

でもさ、手紙を貰うってことはさ、世間一般の男性諸君ならそれなりのことを予想しないかな？少なくとも俺はそう思う。

「だから俺に時間をくれないか有奈。」

「はい？」

予想外の回答だったのだろう。頭の上に？マークがついてそんな顔をしている。

「明日の放課後またここで待っててくれないか？明日までには返事を考えておくから。」

作戦コードネーム、その名も、返事先送り作戦。執行猶予とはこの事だ。死ぬつもりはないけど。

ともかくにも、明日の放課後、実際は振りたくないけどOKを出さないと社会的に抹殺されてしまうわけですから、1日だけでも非リア充を味わっていたい、っとゆうことだ。

ああ、なんて幸せな悩みを抱えてるんだ俺は。・・・世間一般から見て。

当の本人には苦痛だとゆうのに。

屋上から帰る途中、俺は一瞬死ぬことをマジで考えた。

ほとんどエピソード 生と死の境界線に立ち（後書き）

読んでくれてありがとうございます。また次話でお会いしましょう。

ほとんどエピソード3 やっぱり死にたくはないよね。(前書き)

この作品はフィクションです。以下割愛。

ほとんどエピソード3 やっぱり死にたくはないよね。

時刻は午後7時。2話連続で俺のマイルームからのスタートである。昨日と違うところと言えば、俺は音楽を聴きながら雑誌を見てるのではなく、雪と「鉄拳」をやっていることだな。

「んでまあ、有奈の方はどったの？」

前回までの簡単なあらすじを述べると、一昨日、俺は幼馴染で鋼鉄のドS生徒会副会長である倉持百合香に、自分の妹である有奈が放課後に告白するのでOKを出してほしい、とゆう話を聞き、そして今日、本当に有奈が告ってきた、とゆうものだった。

「とりあえず延長。明日の放課後に、って感じだな。」

俺は有奈と百合香から執行猶予をもらった。

「何？これって非リア充最後の夜？」

「前まではリア充して〜！とか思いつきり言ってたのに、いざこゆう状況考えてみると非リアが恋しくなるな。」

「もてる男の余裕にしか見えないんだけど（怒）」

「（怒）まる聞こえだつつの。カツコ閉じまで言わんでいいし。」
バキッ！と俺の使用キャラのパンチが入り俺の勝利が決定する。

「ああ。負けた。てか今日さ、泊まっついていい？」

「いきなりだな。別にいいけど。」

こうして、俺は非リア最後の夜を雪と一緒に過ごした。

しかも寝ないで朝まで鉄拳を延々と対戦していた。

翌日の帰りのSHM。

俺は爆睡をしていた。

雪は1、2、3時間、全て爆睡していた。しかも休み時間も。

「以上、解散。」

担任の末永の話が終わり、クラスの生徒がわらわらと教室を出て行く。

「せつ。おれらも帰ろうぜ。」

マジで眠いので俺はとっとと帰りたい気分だ。朝まで鉄拳とかよくあきなかつたな、俺ら。

「いやいや、お前は有奈の件があるでしょ。教室の入口のどこ見ても。」

「あつ？」

そこには必死の形相でこちらを睨みつけている時期生徒会長候補がいた。正直おつかない。てか怖い。

「ああ、忘れてない。忘れてない。」

と言いつつ、内心忘れていた自分がいた。これを百合香に言ったら殺されるだろう。奴ならやりかねん。

「とりま行つて来いよ。鋼鉄の美女に殺されるぞ。」

「ああ、その通りだ。」

眠い目をこすり、百合香の監視付きで屋上に向かう。正直つらい。

屋上に到着。

今回は展開が早く1000文字足らずでここまで来てしまった。

目の前に広がるは有限な大地ではなく、住宅街などのどこにでもある街並み。ここから見る夜景がキレイなんだよな。

「どうもです。先輩。」

「よう、有奈。」

なんとなく気まずい。てか、3時くらいからハイになってたから有奈のこと忘れてた。

とりあえず、今考えるのはいかにかっこよくOKを出すかだ。アドリブで。

「ちゃんと考えてきてくれましたか？先輩。」

「心配するな。ちゃんと考えてきた。」

嘘だ。さっきも言ったが3時から鉄拳をハイになってやっていて今朝、親に怒鳴られた+有奈のことを忘れてた。

顔は正常を保っているが、体のあちらこちらから嫌な汗が噴き出し

ている。

「それじゃ、答えを聞かせてください！」
ぺこりっ、と思いきり頭を下げられた。

正直止めてほしいよね。重いよね、これ。

「お、おう。それじゃ、言わせてもらおうわ。」
「やべー。なんか良い言葉。アドリブ、アドリブ。」

「まあ、さあ。百合香との関係で結構昔から一緒だけど・・・正直、告白されるとは思ってなかった。まあ、今までは家の違う妹しか思ってたかった。」

正直、有奈のことは百合香の妹としか認識してなかった。・・・こんなことを言ったら有奈には泣かれ、百合香には殺されるんだろうな。

「お前のことは、あんまり知らなよな。けどこれから、これからお前のことを知りたいと思う。」

「えっ？」
びっくりしたのか、有奈は顔をあげた。

「これからよろしくな。有奈。」
う、うまくいった。

とてつもなくほっとした。しかも緊張で眠気までも吹っ飛んだ。

「は、はいっ！こちらこそよろしくお願います。」
うわぁ〜。とてつもなく満面の笑み。まぶしい〜。

こうして、俺と有奈は付き合うことになった。

これが、2週間前の話。

てか、なんで2週間前の3日間を3話構成で話さなくちゃいけないんだよ。

長かったな、序章。

ほとんどエピソード 3 やっぱ死にたくはないよね。(後書き)

読んでくださいますありがとうございます。また次話でお会いしましよ。

一章 第一話 幸せな昼休みと暗雲（前書き）

この物語はフィクションです。以下割引。

一章 第一話 幸せな昼休みと暗雲

味山東高校2-D教室。

4限目が終わり、教室の中にいる生徒は食事の準備を始めている。その中に一人だけ、うな垂れてる少年が居た。

紛れもない俺、本人だ。

「有人、なにうな垂れてんだよ。昼メシにしようぜ！昼メシっ！」
語尾に音符マークが付きそうなテンションで雪が話かれてくる。

こいつは俺が何故こんなにテンションが低いのかしってるのに何でこんなことを聞いてくるのだろうか？バカなのだろうか？アホなのだろうか。

どちらにしても大差はない。

「何だよ、せ・・・ブサイク。」

「おいっ！今セツって言いかけたよな！何でブサイクって言った！」
何で雪だけ片言なんだよ。実際に雪はブサイクではない。
ただウザいから言ってみただけだった。

「メシだったら一人で食ってるよ。おれは屋上だよ。」

「・・・？」

ワザとらしく首を傾げる雪。こいつ一回シバいたろうか？

しかし、雪は本当に忘れっぽく、俺のことになると嫌なことをズバズバと言ってくる奴だから本当に分らないのだろう。

「有奈と食べんだよ。仮にも俺は彼氏。」

「ああ、有奈か。ってゆうか、仮にも、って表現は間違いだろ！」
まあ、そうなんだけど。

そして、これが俺がうな垂れてた理由である。

俺は年上好きなのに悪魔の幼馴染及び鬼の生徒会副会長、百合香のせいで奴の妹である有奈と付き合うことになった。

ほっとくと百合香の逆鱗に触れるからほっとくわけにはいかず、ここ二週間食事、下校は有奈と一緒にだ。

「有人〜！早く屋上に行きなさいよ！ほら、屋上の鍵！」

「おう、サンクス」

ちなみに、うちの学校は屋上への立ち入りは禁止。しかし、鬼の生徒会副会長は二人だけの空間を作り出すために屋上の合鍵を作ったのだ。

「・・・前から思ってたんだけど、お前、合鍵なんてどうやって作ったんだよ。屋上の鍵って結構厳重に管理されてんじゃないの？」

「職員室の鍵はそこまで厳重に管理されてないのよ？まだ続きがききたい？」

「いや、もういい。」

こいつ、将来空き巣になれるよ。

たぶん、雪もそう思ってたろ。

「ほらほら、そんなことよりも早く行きなさい。彼女が待ってるわよ。」

まあ、別に有奈が嫌いなのわけではないし、あいつと話すと正直楽しいんだよな。

そんなことはさておき、屋上へ急ぐ。

有人が屋上への向かい30秒ぐらいたった。

教室の入口には手を振りながら有人を見守る二人、雪と百合香がいる。

「今日で有人は有奈と付き合って2週間になるのか。有人に彼女が出来たことすら忘れてたつてのに早いもんだ。」

「上手くいってるとしても、有奈に変なことしたら有人でも殺すわ。」

笑ながらだが凄く怖い。

はははっ、と雪は苦笑する。雪からしたら冗談に聞こえないのだ。

「あっ・・・あのっ！」

すると、二人に向けられ一つの声がする。

振り向くとそこにはやや身長の低い少女がいた。エンブレムの色を見ると一年生だとゆうことがわかる。

「どうしたの？このクラスの人に何か用かな？」

先程の言葉の声色とは少しトーンを上げて百合香が対応する。

百合香のことを怖がっているわけではないが、少女は今だにオロオロとしている。

「む、村上先輩・・・いますか？」

少女の口からでた言葉に雪と百合香は驚く。

「あゝ、あいつなら外出届出してたから多分外で食ってるよ。用があるなら伝えとこうか？」

冷汗をかきながらも雪が言う。

有人はついさっき有奈と昼を食べに行くために屋上に向かったところだ。

百合香としては雪の言い訳はありがたいの一言だ。

「い、いえ。大丈夫です。失礼します。」

ぺこり、っと綺麗な45°のおじぎをして少女は走り去って行った。

「何だったんだろうね。」

「・・・」

「どうしたの？雪？」

「いや・・・今の子、可愛かったな。」

「・・・」

「お待たせっ。待ったか？」

屋上へ到着。

ちなみに、二週間前に有奈が俺に告白する時の二日、昼休みの時当たり前のように鍵が空いていたがあれは百合香が前もって鍵を開けていたからだ。

屋上への扉の前、そこには笑顔100%の有奈がいた。

「い、いえ。あまり待ってません。」

付き合い始めて2週間経つとゆうのには有奈の言葉には軽い緊張の色が混じっている気がした。

「おしつ、じゃあメシにするか！」

「は、はいっ！」

屋上の鍵を開けて、ベンチに腰掛け、2人で昼メシを食べる。有奈にとっても、半ば俺にとっても幸せなひと時だ。

「.....」

この平凡な日々が二週間続いている。しかし、平凡とゆうものは余りにも脆いとゆうことを俺はすっかり忘れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3725t/>

理想の彼女と現実の壁

2011年11月8日17時03分発行